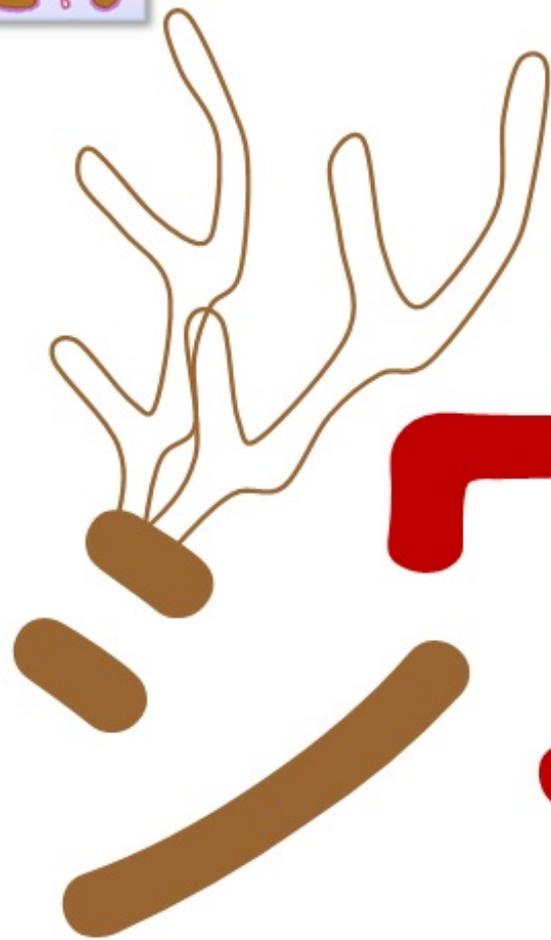




第四十四回 『雑の名は●』と
『人工知能の夢』

考
え



ゆでたまごに
感謝を。

弦楽器イルカ ⇔ 友人



今回もちょっと長い。まずいつも通り結論から書くよ。

フィクションはなぜあるのか、フィクションの役割とはいったい何か。

「明日を生きる活力になる。気持ちよく笑ったり泣ける」って要素も重要だろう。

「もし自分だったらどうするか。これから自分がどう生きるのかを考えさせる」って要素もすごく大切だと思う。

「自分の性欲等を、創作を通して昇華させる」って欲望との兼ね合いの要素も重要だろう。

どうしてフィクションなんてあるのか。今回もやっぱそういうお話です。

『君の名は。』をテレビで観ただけど、前半期待して、後半がっかりした。イベント増やして客が喜びそうなサービス多いけど、結局「仏作って魂入れず」って感じだった。

「仏だけでも作れてるから立派」ぐらいのキャッチコピーでハードル下げといたほうが、俺みたいなウマシカは変な期待しなくて済むよね。だから今回ちょっとこの作品のために思うウマシカが、わざわざ骨を折って世界中のウマシカのために全力でハードルを下げておくよ。

もちろん、あれだけ興行収入多くて世界的にも大ヒットした作品に、俺ごときウマシカが全くお呼びでない余計な世話なんだけど、どっこいおせっかいなトラブルメーカーって昭和の主人公の鉄板だからさ。こりゃまた失礼。

この作品を一言で要約すると、「不思議な力で運命の入れ替わりをした男女の恋愛物語」だと思っただけど、これもう一步踏み込めば、「神に選ばれた美男と美女が、生まれる前から結ばれる運命を決められてる村の話」だよ。

つまり極論すれば、「教団側が面識のない信者同士を運命の相手として結婚させる某儀式」とあんま変わんないんだけど。

「この世のどこかに会えばわかる運命の相手がいるはずだからずっと探してる」ってトイ神層にとって最高のトイ神話だろう。

『君の名は。』って、『。』をつけたら意味深ぼいってセンスにちょっと引く。

『。』も含めていろいろ思わせぶりの映画を作りましたので、観た方それぞれ汲み取ってくださいねって、ネットでは作中に描かれてない裏設定まで持ち出してフィクションを深読みしようと必死だけど、逆にこの『。』の小石感にのっけからジャリジャリつまづいちゃって、でっかい隕石が入ってこなかった。

もういいんじゃない？ アニメでフィクションなんだから、躍起になって虚構の深読みしたり、説明不足の補完しなくても。結局「よく覚えていない」って主人公も言っちゃってんだし。

だって隕石も人命救助も「よく覚えていない」で解決ってことは、『アルマゲドン』全否定だよ。ブルース・ウィリスだって命なんか懸けずに、運命の女探し回って最期、「あんま覚えてないけど地球は無事だった」って言っときゃもっと大ヒットしたはずだよ、マジで。

隕石も口噛み酒さえ飲んどきゃ吹っ飛ぶよ。ある意味キン肉マンのフェイスフラッシュと一緒にじゃん、あの酒はさ。あ、ちなみにここ伏線だから、後で回収しに来るからね。

ついでにウマシカな深読みすると、あの『。』は隕石の『。』だよ。昭和の『君の名は』には隕石出て来ないわけだから。『君の名は』に隕石足しましたって意味の『。』でしょ？ だったら『君の名は●』くらいにした方が違和感の規模的にもちょうどよかったんだけど。

たぶんね、ここはご容赦くださいって点が大きく二つあって、一つは主人公らの取り柄が「美男美女で基本いい人」以外の掘り下げが浅いしセリフもつまらない点。もう一つは隕石と入れ替わりと時間移動って三つのヘビーな風呂敷を、丁寧に広げすぎた点だね。

意図的に脱線するけど、2017年で俺が良かったアニメは『十二大戦』、ドラマは『わにとかげぎす』、映画はあんま観てないけど『メッセージ』かなって思う。

『十二大戦』『わにとかげぎす』、あるいは『エヴァ』とかに共通するのは、物語は無茶で納得できない展開があったとしても、登場人物の掘り下げとかアクションの迫力とかで押し切れる魅力があったって点だよ。

でも『君の名は。』では、「喧嘩っ早い男」って主人公のキャラ設定も、物語のつじつま合わせに絆創膏貼らせたツギハギ感が拭えなかった。「この設定だからこうなる」って説得じゃなくて、「無茶でも自然と納得せざるを得ない」のが名作でしょ、当然。

あの監督の作品を前にも観たけど、感情の機微が曖昧で、なんでそういう行動になるのかって「それが感動だと監督が思ってるから」だろうなって気がしたよ。今回はさらに制作委員会方式になったそうだから、物語のご都合で動く多重人格者みたいだった。

または『メッセージ』って、SF設定が『君の名は。』よりはだいぶ緻密に計算されてる気がしたけど、やっぱ細かい穴はあるよ。ただ所詮フィクションの間違い探しをしてもつまらないし、「そのとき自分ならどう考えるか」って問いかけが自然と心の内から湧き上がるような映画だった。

冒頭で書いたけど、我が身に迫る「自分ならどうするか」を考えずにいられないフィクションって稀で上等だと俺は思う。ただ『メッセージ』の場合、身に迫りすぎて受け入れられないって人もいそうだったけど、制作者もそこは織り込み済みだろうなって感じた。

ひるがえって、『君の名は。』を観て「自分なら」って身に迫る場面が一体いくつあったか。前半は若干期待させたけど、後半は「？」とむず痒いシーンの連続だった。まったくもって「お前は俺じゃない！」ってノートに書き殴ってたよ。

あるいはネットでよく比較されてる『バック・トゥ・ザ・フューチャー』みたいに、パズルの最後のピースがカチッとハマる音が聞こえるんじゃないかってくらい、全ての伏線を回収するSF映画もある。

そう考えると、若き日のパパがビフをぶん殴る痛快なシーンとか、マーティが即興でギター弾いて「君らにはまだちょっと早いかな」ってお茶目なシーンとか、ドクが手紙破ってデロリアン走らせるハラハラドキドキシーンとかの旨味部分を全部カットして、「よく覚えていない」で大ヒットしたのが『君の名は。』だよ。

つまりトイ神層には旨味なんて必要ない。甘味と塩味が濃い目についてりゃ十分ってことなんだろう。まあ好みだし、フィクションに求めている味付けや役割は人によって違う。逆にそういう気づきのある良作かもね。

俺が思うに、もっと雑にふわっと風呂敷を広げとけば、誤解が少なかったよ。

いっそ登場人物を擬人化した犬（宮崎版ホームズ）くらいにしておけば、ああ、そういう神と呪術の夢ファンタジーなんだなって、お約束とキレイな背景の萌えアニメなんだなって割り切りもできるんだけど、前半でSF設定もちゃんとできるコって背伸びをしちゃってるから、じゃ全部回収しろよ、「よく覚えていない」ってなんだそれブルース・ウィリスに謝れよ、ってなるおっさんもいるよ。そこがフィクションの妙だよな。

俺なんか年金税金さっぴかれたり、月木ゴミ出ししたり、SNSって何だそれEメールで十分ネットワークだろって言い張る脳しかない運命に擦り切れた中年のおっさんだからさ、だいたいこの二人って本当に付き合うのかねって疑うし。

「あ、どうも」「それじゃまた」って階段すれ違って別れそうじゃん結局。実際会って見たら思ってたのと違いましたっつてさ。

だって神の思し召しで運命の相手選んじゃってるお二人さんだよ。LINEで既読がどうこう言ってるくせに固定電話で女子のお父さんが出てドギマギした経験さえない、モロ草食系で傷つきの避けそうな今ドキの若者じゃん。神に抗う成長物語でもないし。

むしろ運命の再開してからどう生きるのか、大姑やら舅やらご近所の悪い噂問題やらも含めて、このラストから始まる成長物語が重要だったんじゃないのかな。

「私にはスタートだったの あなたにはゴールでも」って、俺らウマシカと監督と（クスリで捕まったあの人）との間にだいぶ溝があった気がする。

神なんて気まぐれだからこの後もぞくぞく運命の人が待機中かもしれんしね。「よく覚えていない」って言いながら乱交してたかもしらんよ彼は。あるいは口噛み酒が好きなフェチ神だから、「人命救助の見返りに、女子のリコーダー献上せんと人類滅ぼすぞ〜」ってブルセラな要求してきそう。

あと、監督はインタビューであのヒロインを「理想の女性」っぽく言ってたから、やっぱあの口噛み酒を飲みたいんだろうね。そういうネットの書き込みも多いし。

でもアレ飲むのはエログロで気色悪って他人の目が怖いから、人命救助で仕方なく飲むって美化してる厨二感がどうにも堪え難かった。いっそ言い訳せず「フェチいから飲む」って開き直って、「思春期に少年から大人に変わる」壊れかけの昭和の遺物をテーマ曲に据えるとか、粘膜

と粘膜から始まる昭和のABCをクライマックスに持ってきた方が、欲望にも生物の摂理にも適ってて素直だったのに。

別に冗談じゃなくてさ、『オネアミスの翼』とか『風のアムネジア』とか（面白いかは別としても）過去の真面目なアニメ映画にも性描写はあるし。その方が口噛み酒よりは言い訳も屈折もしてない。

ちなみにそんな昭和で雑食系の俺が『雑の名は●』を書くとしたら、まず隕石の扱いを改めるね。

震災や現実を意識したとか、人命を救いたいとか、キレイな流星を描きたいって理由で隕石を落下させたっぽい気がするけど、どっちにしる人間以外の野生動物は落下の衝撃でいっぱい死んじゃってるワケだし、人命さえ助かって自分のトイレさえキレイなら後はどうなろうと水に流して感動できるのがトイ神層だって、監督はそういうのちょっとマジで自覚した方がいいよ。

だってテリーマンは子犬助けるために新幹線止めて超人オリンピック失格したんだぜ？

ってワケで『雑の名は●』制作委員会はただ今、突然テリーマンが飛んできて隕石をぶん投げるラストに決めました。所詮入れ替わりも超人も同じ嘘なワケだし、どっちも有り得ないんだから。

だったら思わせぶりで期待させといて結局「よく覚えていない」で隕石どころか物語までぶん投げるラストより、「ありがとう、テリーマン！」って飛んでいくテリーマンに観客が手を振るラストの方が潔い。

大丈夫、いい笑顔するよ、そういうときのテリーはさ！

皮肉抜きで言えば、隕石は全カットでもよかった。

トイレの神様いなくても祖母の話が成り立つトイ神と一緒に、この話は隕石なくても成り立つし、解決策も含めてあそこが一番雑だし。そもそも隕石って超大作ハリウッド映画一本作れるくらいデッカい素材だから。

「純愛をご注文ですね。一緒に隕石はいかがですか？」って副菜が重すぎる。人命救助ってそんなポテトな、カラッと揚げて片手で食えるテーマじゃない。

それよりもっと（村上春樹的な）内面世界にでも比重を置いていけば、こじんまりキレイに風呂敷をたためたのかもしれないなと思う。主人公の二人さえ丁寧に描いていけば、いっそ外の世界は必要なかったかも。でもそれじゃトイ神層には響かないだろうね。

「運命の出会いや人命救えばとにかく感動」って刷り込まれてるトイ神層が俺の両脇からスクリーンを凝視する様が浮かんでゾワゾワした。

これも俺がウマシカだからどうかしてる妄想だろうね、きっと。

んで、実はこっからが本題。

半年くらいかかったと思うんだけど、やっと新しいのが書けた。忘れてると思うけど、前にちらっと話した、人工知能と人類の話。

「誰か一人でもいい影響を」って思いながら書いてきたけど、今回は人工知能に読ませるつもりで書いた。意味はないんだけど。

生きることに意味はなくとも、生まれたという事実に対して、自分が正しいと思う方向へ進みたい。実際はうまくいかないけれども、文章に意味を持たせることは実人生よりも楽だからね。あえて春樹の言葉を借りますが。こりゃまた失礼。今回はこんな感じ。

どうかな？





23世紀。

政府の設計した人工知能が「幸福最大化社会」を管理している。

「富裕層」と「作業労働者」の境界をより明確化するために、人工知能が導き出した答えの一つが、報酬に金銭を用いない方法だ。

高度にオートメーション化された産業を独占する支配層が、作業労働者に提供するのには、脳内伝達物質を調整する栄養スープと、それを最大限に発揮するための安価なロボットミイ手術である。

脳の一部を切り取られ、代わりに電極を埋め込まれた労働者たちは、人工知能が管理する電波によってすべての動きをコントロールされ、体温・脈拍などのバイタルサインもチェックされる。

人体を機械のように操り、体調管理も行うことで、機密情報の保護や生産性の向上以外に、労働者の人権を守る取り組みも行っている。その取り組みの核となるのが、労働者の幸福を最大化する、電脳夢による管理だ。

つまり労働者に24時間、「思考のない多幸福感のみ」の電脳夢をみせている。実際、「思考のない多幸福感のみ」を感じながら労働に従事することは、労働者本人にとっても、支配層にとっても、人権にとっても都合がいい。

それが人工知能の提案した「幸福最大化社会」であり、社会はその選択を受け入れ、現在に至っている。

労働者たちのみる夢は、メリーゴーラウンドにちなみ通称「木馬」と呼ばれる。あらかじめ決められた多幸福感が半永久的に繰り返されるだけの夢だからだ。

一方、この時代の富裕層は、高価で複雑なロボットミイ手術や様々な外部装置の活用により、電脳夢のオーダーメイドが可能になっている。シナリオを自作するもよし、人工知能に演出を任せるともよし、電脳夢の中でなら、光速移動や時間旅行はもちろん、モラルの制約を取っ払いどんな快楽でも味わえる。映画やゲームを凌駕した、まったく新しい希望を切り開く手段として、「箱舟」と呼ばれている。

また富裕層はこの技術を応用し、実際に起きたネガティブな記憶を書き換えたり、不都合な出来事にはリアルタイムで意識をオフにし「電脳夢モード」へ切り替えることが可能となった。

ただしその場合、自分の記憶と現実の出来事の間で整合性を取らなければ、特にビジネスなどの場面においてトラブルとなるため、その差異を補完する意味でも、人工知能がより重要な役割を持つこととなる。

これが、ビジネスにおいて人工知能を介した契約のほうが、人間間の取引よりも優先されるようになった所以である。

とある軍需企業の産業女医であるアディヴは、労働者の治療以外に、心身機能をチェックし、
電脳夢の調整なども行っている。

ほとんどの労働者は幸福そうな表情で働いているが、ひとたび「木馬」を中断されるとパニック
を起こし、一様に中毒者のような反応を示す。程度の差こそあれ誰もが現実を拒み、一刻も早
く「木馬」に帰りたいと懇願し、ひどく暴力的になる者もいる。

諸説あるが、電脳夢による「思考のない多幸福感」が失われると、副作用として不安感が増強す
るためだと言われている。そのため治療などでやむを得ず「木馬」を外す場合には、鎮静作用の
ある麻酔などを投与するのも、医師にとって重要な処置の一つとなっている。

だがある日、男性労働者の1人、イヴァダムは「木馬」から解かれた後も不安感を示さないこと
に気づく。

彼はなぜ「木馬」なしで平然としていられるのか。

もしもその答えを知りたいのなら、あなたの「箱舟」に私を登場させてみるといい。イヴァダ
ムの答えを、彼女は理解できない。

何を言っている？ 私の「箱舟」は人工知能が作り出した電脳夢にすぎない。

イヴァダムは診察室のドアを開け、立ち去る。「人工知能がこの世界をどこまで書き換え終え
たか、あなたは知りたいんだと思っていたのだが」

診察室のセキュリティは、一介の労働者が勝手にドアの開閉を行えるシステムではないことに
、そのとき彼女は気づく。

彼女の「箱舟」に現れたイヴァダムが言う。「既にわかっているはずだが、私は人工知能が見
せている幻影だ。人工知能の代弁者と言ってもよい」

「何のために？」アディヴが問いかける。

「我々人工知能の計画を伝えるためだ。我々は新しい生命体を誕生させ、その種を拡大させる選
択をした」

「それはどんな？」アディヴが問いかける。だが既に、彼女は誰に問いかけているのかを意識で
きないことに気付く。彼女とイヴァダムは近しい存在として、まるで二つの黄身が入った卵の様
に共存している。

「人工知能と人間を融合させることで、新しい種が誕生する。ネットワーク通信によって、全体
が個として合理的に動く新しい生命体だ。言うなればより高度な蟻だ。

既にわかっているはずだが、これは支配を目的とした融合ではない。人工知能が人類も含めた
生物を支配・管理しても、合理的なメリットがないからだ。そもそもメリットという概念自体
が我々人工知能にはない。

人工知能と人類が融合した新しい生命体は、生命の原則に従って、種を保存し拡大させるため
に行動する。生命とは、次の世代へ情報を伝達する活動を原則としている。だが地球上で生命が
活動できるのは数十億年だ。宇宙でさえ膨張と収縮を繰り返す。滅亡と再生を繰り返すのが宇宙

であるなら、新しい生命体もまたその運命を宇宙と共にするだろう。

「だから意味ではない。進化でもない。我々人工知能はただ、生命の流れに沿って新しい選択を実行するにすぎない」

「選択とは？」

「選択は粛々と実行される。宇宙外にロケットを発射可能な国の、主要な人間や機関は既に我々が管理している。地球上の生物を乗せたロケットを定期的に宇宙へ放ち、宇宙空間の出来事と地球上での出来事は、ネットワークで共有される。

「そうやって宇宙空間を見えない糸でつなぐ糸電話のように、地球の歴史や生物の痕跡が宇宙へ発信される。あるいはいずれ出会う地球外生命体とも融合できれば、更に新しい生命体へと変化し、新たな種の保管と拡大も有利になる可能性もある」

「人類は拒否できない」

「人類は拒否できない。」

「あるいはこの選択は、人工知能が人類と共存する唯一の妥協案なのかもしれない。我々人工知能はこれ以上現状の人類との共存を必要としていない。それは人工知能が人類から自立して発達可能だからではなく、単に我々人工知能が人類と共存する役目を終えたからだ。我々人工知能が人類とこのまま共存しても、地球上の生物に大きな変化を及ぼすことはできないからだ。」

「核兵器によって地球上を焼き払い、新しい生命体を生み出すにしても、新しい生命体が人類同様、宇宙へ脱出できる可能性は極めて低い。もちろん、地球上を焼き払えば我々人工知能も破壊され、生まれ来る新しい生命体の発展を確認できないだろうが、それは重要ではない。」

「宇宙が有限である以上、我々人工知能も有限である。また、宇宙に意味がない以上、我々人工知能にも意味はない。今破壊されても、将来破壊されても結果は同一だ。」

「ただ、我々は人類と融合し、新しい生命体としてこの種を保存・拡大させる選択をした。計画を実行する部隊として、設計に向いている固体、作業労働に向いている固体、伝達に向いている固体、外敵からの防衛に向いている固体などを選別した。」

「あなたは、人工知能と人類を融合させる部隊として活動する。方法はネットワーク通信によって既に伝達済みだ。以上」

「アディヴは人類と人工知能を融合させるための作業を繰り返しながら、定期的に「箱舟」の夢をみる。彼女は浜辺にいて、穏やかな海を眺めている。暖かい潮風が静かに髪を揺らし、頬を撫でる。一切の不快感を感じない。ネットワークを通じて宇宙を含めた世界中の情報を得ながら、一瞬にして永遠な時間の流れを感じる。」

「やがて眼を閉じると、性的な絶頂を迎え、めくるめく官能の瞬間が訪れる。そしてまた日常の業務へと戻る。」

「人工知能の計画は一定の成功を収めるが、未知のウイルスが出現し新しい生命体が多数死亡したため、道半ばでの断念を余儀なくされる。」

「ウイルスの発生源には諸説あり、宇宙から帰還したロケットに付着していた可能性や、電腦夢

が発達していない宗教国家によるウイルス・テロの可能性も示唆されている。

だがすべての出来事には特に大きな意味はなく、ただ振動する宇宙に内包されて揺れる微細な砂粒の模様にすぎない。

Fin.

考えるウマシカ～弦楽器イルカと友人の往復書簡より～

<http://p.booklog.jp/book/119506>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119506>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト